

みどり樹

vol.46
Winter 2010



特集
さらなる謎の解明へ。
新たな研究成果に注目が集まる
ナスカの地上絵プロジェクト。
保健管理センター訪問
医学部を有する
総合大学ならではの態勢で
こころと体の健康をサポート。





南アメリカ西部に位置し、コロンビア、エクアドル、ブラジル、ボリビア、チリと国境を接する共和制国家。首都はリマ。紀元前から多くの古代文明が栄え、16世紀には、当時世界最大級だったインカ帝国の中心地があった。ナスカの地上絵のほかマチュ・ピチュやクスコ市街などの世界遺産を有する。



特集

さらなる謎の解明へ。 新たな研究成果に注目が集まる ナスカの地上絵プロジェクト。

2006年にナスカ台地に新たな地上絵100点以上を発見し、世界的にも注目を集めた人文学部坂井教授を中心とする「ナスカ地上絵プロジェクトチーム」。文化人類学、地理学、心理学、情報科学など、専門の異なるメンバーによる学際的な研究・調査がその後も続けられ、さまざまな角度からナスカの地上絵にまつわる謎の解明が試みられている。従来定説を覆す発見や新たな着眼点からのアプローチなど、先生方それぞれの研究・調査の現状をお話し頂いた。



心理学的アプローチで 痕跡から先人の思いに触れる

「心理学は生きている人間を相手にデータをとり、それに基づいて研究をする学問。当初、描き手がもう存在しない「ナスカの地上絵」の研究に私が参加することは非常に難しく思いました」と渡邊先生。しかし、ナスカのレストランで壁面の落書きを目にしたときに、ナスカの地上絵もこの落書きと同じように、そこに残された痕跡から、描かれたその時の様子や人々のふるまいを推定



渡邊洋一

わたなべよういち ● 人文学部教授・学部長 / 専門は認知心理学。東北大学大学院文学研究科博士課程満期退学。文字や顔等のパターン認識を研究してきたが、本プロジェクトではナスカ台地における空間認識を研究。



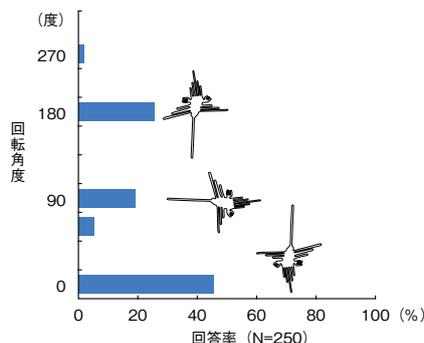
たくさんの落書きが見られるナスカ市街のレストラン。壁面には、柱の幅やアーチの形状などに合わせて文字や図形が描かれている。

することができる考えたという。

例えば、ハチドリやサル、クモなど、動物の地上絵の向きや大きさから当時の人々の考え方を推測する。四方八方のうち、どちらかの方向に特別な意味を持たせてはいなかっただろうか、この場所にこの向きでこの大きさで絵を描いたということは、だれに見せることを想定していたのだろう、これらは人々が周囲の空間をどのように認知していたのかという心理学的な問題を明らかにする糸口になると考えている。実際にハチドリやサルの地上絵を学生たちに配置させる実験を行い、絵の向きに対する好みや当時のナスカの人々と共通しているという仮説の上で、地上絵の描かれた向きなどについて検討している。

多くの直線が集中している場所 (ラインセンター)に関する研究

さらに、渡邊先生は1,000個ほどある地上絵のうち700個前後と大半を占めている放射状直線に着目。その直線の幅は15cmほどの細いものから数十mにもおよぶ幅広いものまでさまざま。ナスカ台地全体にまさに縦横無尽に張り巡らされている。一見、ランダムに描かれているようでもあるが、どれもが他の直線と接しているという規則性が見られる。たくさんの直線が集中



学生を対象にナスカの地上絵の「ハチドリ」はどの方向から見るのが自然かという調査を実施した結果、斜めという回答はゼロだった。

している場所(ラインセンター)を人が移動する際の手掛かりという観点から、情報科学の本多先生との連携によりその位置の特徴や役割について研究を進めている。

2000年以上にもわたって 地上絵が消えなかった理由とは

地理学が専門の阿子島先生によると、ナスカ台地には、涸れ川跡がたくさんあって、北東から南西にマフェロス川が斜めに横切っており、東側の丘陵地に発するいくつかの河道はマフェロス川に合流するため、台地の北西部部分にはほとんど河道はない。逆に、台地の南東部分には河道跡が密に分



阿子島功

あこじまいさお ● 山形大学名誉教授・人文学部を2009年定年退職。現在福島大学特任教授 / 専門は環境地理学、地形学。東北大学大学院理学研究科博士課程中退、理博。ナスカでは地形形成史、地形分類、古環境復元等の研究。

布している。ナスカの地上絵のうち、動物などの図像が集中しているのは台地の北西側で、南東側には少ない。当時、すでに洪水の被害に遭いにくい土地条件が考慮されて地上絵が描かれたものと考えられる。



バンアメリカン・ハイウェイに遮られて流路が変わった洪水流の跡。セスナ機から撮影。洪水流の全体像を人工衛星画像から解析している。

海岸砂漠では雨が減少に降らず絶対量も少ないものの、植物がほとんど生えていない裸地のため、普段は涸れている川筋に沿って洪水流が発生し、大幅な地形変化がおきている。特に、バンアメリカン・ハイウェイが谷を遮る部分では、流れが堰き止められて洪水の流路が変化し、安定したエリアに描かれたはずの地上絵にも洪水が迫るといった問題も生じてきている。

ナスカの地上絵はなぜ描かれたのか? という謎に対して、これまでさまざまな説が唱えられてきた。このうち、豊作や豊穡を祈願するために、地上絵が制作されたという説がもっとも有力である。地上絵の線の



中央に見えるマウンドがラインセンター。複数の直線がラインセンターに集まっている。

いくつかは水を乞い願うナスカの人々が地下の断層線に沿った水脈を指し示したという論文もあるが、地上絵と地質構造との対応を再検討したところ、対応関係は無理ということが確かめられた。

衛星画像のデータから ラインセンターの役割を紐解く

情報科学が専門の本多先生は、衛星画像のデータの分析にあっているが、現在、特に注視しているのは、“ラインセンター”。この時代の人々はまだ文字を持たなかったということで、何らかの情報を伝えたいときには会うしかなかったということになる。ナスカ台地の端から端へ、歩いて移動したと推測できる。ラインセンターは目印、中継地点であり、直線と直線とを結ぶコネクターであったのではないかと。ナスカ台地には、人の移動と情報を伝達するネッ



石積みによって表されたラインセンター。これくらいの規模のものは衛星画像では確認できないため、現地調査が必要。



本多 薫

ほんだかおる ●人文学部准教授
／専門は情報科学。東京理科大学工学部、日本大学大学院博士課程修了、博士(工学)。生体情報処理等の研究に従事。地上絵のデータベース化、統計学的な分析を担当。

トワークが存在したという仮説が考えられる。しかも、ネットワークに求められる安定性、効率性、信頼性を考えると、2点を結ぶだけの単線では不十分で、断線した場合の迂回路はあるか、基幹となる中継地や複数の経路が存在しているか、効率性の面からはいかに短い距離で移動できるかなどに注目しながら調査研究を進めている。

ラインセンター現地調査の副産物 手つかずの土器との遭遇

衛星画像は地上分解能0.61mという高精度なものだが、人工衛星は斜めから撮影することになるため、どうしてもゆがみが生じてしまう。より正確な分布図を作成するためにGPSデータを取ってCADに載せるといった手法をとっている。また、ラインセンターの研究に関しては、衛星画像でラインセンターらしき地点を確認すると、ナスカに足を運ぶ機会の多い坂井先生に現地調査を依頼。メインコネクターともいえる主要なラインセンターは、視認性が高く、自然災害の影響を受けにくい山や丘が多く、中には、衛星画像では確認できない石

積みや盛り土による小さなラインセンターも見られる。その過程で思わぬ副産物として、まだ調査されていない土器の破片に遭遇した。

縦横無尽に描かれた直線の地上絵、 その起原についての定説を覆す

文化人類学が専門で、本プロジェクトの中心人物でもある坂井正人先生は、現在も現地ナスカで調査にあっている。今、坂井先生が強く関心を寄せているのが放射状直線の地上絵とその中心点。ハチドリ、サル、クモといった動物の地上絵が広く知られている一方で、あまり注目されないことのない放射状直線の地上絵。1980年代には米国の調査団によって放射状直線の地上絵に焦点をあてた現地調査が実施されたものの、途中でトラブルが発生し調査は中断し、その後、十分な現地調査を実施できなかった。

先行研究では、ナスカ台地に分布する放射状直線の中心点は62個とされていたが、坂井先生等の調査では新たな中心点30個以上が見つかった。まだナスカ台地全体を調査したわけではないので、さらに新しい中心点が見つかる可能性もある。これらの中心点の周辺を踏査したところ、300箇所以上で土器の破片が大量に確認された。それらの土器の中には、ナスカ期(紀元前200年～紀元後700年ごろ)以前のバラカス期(前400～前200年)のものが含まれており、ナスカ台地に放射状直線が描かれたのは、バラカス期までさかのぼることと推測される。1980年代の調査では、ナスカ台地の放射状直線の制作はナスカ期以降とされたが、それよりも300年以上も古い時期に描かれた可能性が高くなった。

「現代の地上絵」をヒントに 2000年前の地上絵の真実に迫る

まだまだ謎の多い「ナスカの地上絵」。特に、全長約100mから300mにもおよぶ巨大な動物の地上絵はどのようにして描かれたのかという謎は実に興味深い。当初、坂井先生は小さな下絵があって、その延長上の点と点を結んで描いていったのではないかと仮説を立てていたが、そうした下絵らしきものは見つからない。そんな中、21世紀の今も現地の農民たちによって地上絵が描かれているという事実を知り、2008年夏、その「現代の地上絵」を調査するために坂井先生はナスカ台地を訪れた。



ラインセンターと見られる小さな山を踏査する坂井先生たち。確かにこれほどの高さがあれば視認性も高く、ランドマークとしての役割も十分に果たせそうだ。

ナスカ台地の西方へと車を走らせ、周囲を見渡すと、突然、巨大な地上絵が目飛び込んできたという。急な斜面に描かれた全長30m以上の人物画で、世界遺産に登録されている「ナスカの地上絵」よりはずいぶん新しい。それもそのはず、その地上絵は

近くの町に住む女性によってわずか5年前に描かれたもので、しかもたった2人で、わずか30分ほどで完成させたものだという。畑に種を播くときに身につけた距離感覚を応用して、右半分、左半分を2人で手分けして描いている。相手との距離を測りながら足並みをそろえることで左右バランスのとれた地上絵を描き上げることができている。

地上絵は過去の遺物ではなく、現代にも受け継がれている文化。2,000年前の人々も同じ手法で地上絵を描いていたとは断定できないが、これらの絵の研究を進めることで「ナスカの地上絵」の真実にまた一歩近づけるに違いない。

現地調査のための環境充実めざし、ナスカに初の研究拠点設立へ。

山形大学には、国際的に通用する研究成果をあげる可能性がある研究チームを支援する「YU-COE（山形大学先端的な研究拠点）」制度がある。「ナスカ地上絵プロジェクトチーム」もその一つに選ばれ、現地に研究拠点を設けることになった。研究拠点を構えることにより現地調査の利便性が増すばかりではなく、遺物や資料なども長期貸し出しが受けられるようになるなど、待遇面でのメリットも大きく、研究のスピードアップ・効率アップが図られる。



手つかずの土器の破片がドサッと落ちている。丁寧に持ち帰り、修復し、模様などから作られた年代を特定する。



坂井正人

さかしまさと●人文学部教授
／専門は文化人類学・アンデス考古学。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。1994年よりナスカ地上絵に関する研究に従事してきた。

人文学部

Faculty of
Literature and Social Sciences

「第2回FDシンポジウム —スタートアップセミナーをめぐって—」を実施



9月14日(火)に「平成22年度第2回人文学部FDシンポジウム—スタートアップセミナーをめぐって—」を実施しました。

本セミナーは、人文学部のFD活動の一環として、本年度、基盤教育で新たに始まった「スタートアップセミナー」について、具体的な実践例を持ち寄り、授業方法に係る問題点についての意見交換や改善のための情報交換などを目的として企画したものです。

当日は、約50人の教職員が参加のもと、第1部の実践報告では、4人のパネリスト

が各々今年度から新たにスタートした「スタートアップセミナー」についての実践報告を行いました。後半は地域教育文化学部及び理学部から2人の先生にも加わっていただき、当該学部での実践の状況についてご報告をしていただきました。

第2部の討議では、授業方法に係る問題点や改善のための情報交換などについて活発な話し合いがなされ、充実したひと時となりました。

文化創造学科異文化交流コース 欧米文化研修セミナー(ボストン)を実施

地域教育文化学部

Faculty of
Education, Art and Science



9月4日(土)～19日(日)の2週間、16人が参加して、アメリカのボストンで欧米文化研修セミナーが実施されました。

英語研修で通った学校には、フランス・リビア・韓国・コロンビア・カナダなど、世界各国から多くの生徒が年齢を問わず在籍しています。参加学生は英語研修だけでなく、友人を作ったり、ハーバード大学やケネディ生家の見学、レッドソックスの試合観戦をしたり空き時間も十分に楽しみました。

シモンズ大学では日本語授業の見学やア

メリカの教育に関する講義を聴く機会もありました。日本語を履修している方々の上手な日本語や、「日本が大好き」という思いの強さに、学生たちは、自分たちももっと英語を頑張って勉強しなければと感じたようです。

滞在中はホームステイでしたが、ホストファミリーはとても優しく、分かるまで何度も話してくれたり、英語の勉強のために一緒にレシピを読みながら料理をしてくれたホストマザーもいらっしゃいました。

理学部

Faculty of Science

公開講座「DNAでつなぐサイエンス」を開催



10月23日(土)・24日(日)の2日間の日程で、高校生以上を対象にした理学部公開講座「DNAでつなぐサイエンス」を開催しました。キャンパスが賑わう大学祭「八峰祭」との同日開催となった今回は、DNA(デオキシリボ核酸)をテーマに29人の受講者が理学教員による指導の下、1日目に実験を行い、2日目には実験の解析と説明を受けました。個体によって異なるDNA(遺伝子情報)を実際に目で見える実験では、自分の細胞を取り出し、観察することで多くの方が興味深く積極

的に取り組んでいました。受講者からは「自分のDNAを目に見える形で認識できて非常に興味深かった」、「概念だけで理解していたDNAを実際に見て感じ取ることができた」などの感想が寄せられ、とても好評でした。

また、当日は理学部全5学科による研究室公開も行われました。毎年、公開講座の受講者を対象として行っていましたが、今回は、大学祭に訪れた多くの方に気軽に立ち寄って頂こうと終日公開したところ、参加者から大変好評をいただきました。



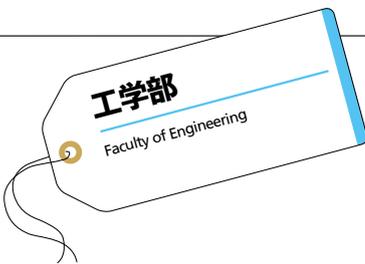
医学部・東根市合同プロジェクト 「悠遊健歩」に結城学長も参加

10月16日(土)、山形大学医学部・東根市の合同プロジェクト「悠遊健歩」を開催しました。

このイベントは、医学部の教育・研究活動と東根市民の健康施策に関し、相互協力による推進と発展を目指すもので、医学部事務部門、附属病院診療部・看護部、教員・学生が運営に参加、地域貢献を推進する山形大学活性化プロジェクトとして平成18年から行われています。5回目の開催となる今年は、およそ250人の東根市民が参

加、本学からは東根市出身の結城学長が開会式で挨拶、ウォーキングや午後の講演会まで、全プログラムに参加されました。

参加者は骨密度測定等の健康チェックを受けた後、5km・7kmをウォーキングし、ゴール後には農学部提供の里芋を使用した芋煮を味わった後、調査班担当の看護学科教員による悠遊健歩の成果報告、健康講話を聞き、山形弁研究家のダニエル・カール氏の講演「ダニエル流 食と健康」に笑い、1日を満喫していました。



山形大学工学部百周年記念会館 落成式典を挙行了しました

10月9日(土)、山形大学工学部百周年記念会館落成式典を挙行了しました。

当日は、本学部の卒業生・教職員、企業、地元の関係者ら約500人にご参加いただきました。大場好弘工学部長は、式辞の中で「建設された百周年記念会館が卒業生、企業や市民と大学をつなぐ拠点となり誰もが心地よく交流できるようにしていきたい」と述べました。式典後は、会館前でテープカットを行い、出席者の皆様に会館内を見学していただきました。

本会館は、鉄筋コンクリート・鉄骨2階建てで延べ床面積894平方メートル。1階にはセミナールーム、同窓会組織米沢工業会・工学部後援会の事務室、2階は、全面ガラス張り眺望のすばらしい迎賓室、一般市民の方も利用可能なカフェなどが入っています。設計はニューヨーク近代美術館などの設計で知られる世界的に著名な建築家、高宮眞介氏。同氏の設計プランは全国公募で寄せられた70件を超える設計案の中から選出されたものです。



フィデアホールディングス株式会社 取締役会議長 町田睿氏の講演会が開催されました

10月22日(金)、荘内銀行の前頭取であり、現在フィデアホールディングス株式会社取締役会議長で、山形大学経営協議会の委員でもある町田睿氏による「大学教育と農学の役割」と題した特別講演会が農学部で開催され、市民の方と多数の教職員が聴講しました。

山形大学は、結城章夫学長のもと「自然と人間の共生」をテーマとして、教育・研究及び地域貢献に取り組み、キラリと光る存在感のある大学を目指しています。

荘内銀行と農学部は平成18年12月に「連

携協力協定」を結び、農学部の知的資源を活用して、これまでも食品産業の競争力強化や農業の持続的発展、環境保全など産学官連携を通じた地域貢献を行ってきました。昨年度に引き続き町田氏を講師に迎えたこの講演会では、豊富な人生経験に裏打ちされた町田氏の経営哲学から、地域に愛される農学部となるためのご提言を賜りました。

農学部は、今後も産学官連携を通じて地域経済や産業の活性化に寄与して参ります。



「保健管理センター」のツートップ。
 学生と教職員の健康を守りつつ、
 専門分野の研究にも余念のない



保健管理センターを中心に
 各キャンパスに健康管理の窓口

本学では、3学部の拠点であり全学部の
 新生が1年間学ぶ場でもある小白川キャン
 パスに保健管理センターがあり、飯田
 キャンパスには学生の病気にオールラウ
 ンドに対応できる医学部附属病院がある。さら
 に、米沢キャンパスには保健管理室、鶴
 岡キャンパスには保健室がある。それぞれ
 に医師または看護師、カウンセラーが勤務
 し、学生や教職員の健康支援にあたってい



相談に訪れた学生にこやかな表情で話しかける鎌田先生。
 どんな相談にも先入観を抱かず、一人ひとりと真剣に向き
 合ってアドバイスするようにしている。



小白川キャンパス／(左より)
 カウンセラー 伊藤先生、カウ
 ンセラー 區藤(くどう)先生



米沢キャンパス／(後列左よ
 り)カウンセラー 新野先生、
 看護師 曾根さん(前列左より)
 カウンセラー 石本先生、カウ
 ンセラー 高橋先生



飯田キャンパス／(左より)
 事務職員 清家さん、カウンセ
 ラー 丹野先生



鶴岡キャンパス／(左より)
 看護師 角田さん、カウンセ
 ラー 加藤先生

る。所長の富樫先生と副所長の鎌田先生は、
 定期的に米沢や鶴岡にも出向いて全学的な
 対応の充実にも努めている。

また、体の健康はもちろん最近はメンタ
 ルヘルス(こころの健康)に対するケアが強
 く求められていることから、保健管理セン
 ターでは学生個人に必要なに応じて行う「メン
 タルヘルス相談・学生相談室での心理相
 談(カウンセリング)」と基盤教育の一環と
 して学生全体に行う「こころと体の健康つ
 くり」を担当している。さらに、心身の健康支

援の一環として公開講座を開催。今年度は
 「発達障害」をテーマに、その理解と支援に
 ついて専門の先生を招いて講演を行った。

イキイキとした大学生活のため
 重要性増すメンタルヘルス支援

「単に、こころの病気への対応や支援に
 とどまらず、イキイキとした学生生活を送り、
 さらに卒業後に充実した社会人生活が送れ
 るように援助していくことが大学でのメン
 タルヘルスには求められています」と鎌田先
 生。そのため、保健管理センターや各キャン
 パスの保健室などに学生相談室を開設し、
 大学生活の中で生じるさまざまなこころの
 問題に関する相談を受け付けている。中学
 や高校時代から学校にカウンセリングとい



富樫 整

とがしひとし ●保健管理セン
 ター所長(教授)・内科医・産業医
 ／山形大学医学部医学科卒業。
 専門分野は消化器内科学。現在、
 地域教育文化学部の教員等と学
 生のメタボ予防研究に取り組ん
 でいる。

医学部を有する 総合大学ならではの態勢で こころと体の健康をサポート。

富樫整 保健管理センター 所長／鎌田光宏 保健管理センター 副所長

昭和44年10月、学生や教職員の心身の健康支援を目的に「保健管理センター」が設立された。病気やけがの診察、応急処置を無料で行うとともに、麻疹や新型インフルエンザなどの学校感染症の予防と蔓延防止を含めた保健施策の立案なども担当している。また、近年は特にこころの健康面を重視し、保健管理センターや各キャンパスの保健室などに学生相談室を開設。富樫所長、鎌田副所長をはじめとするスタッフ一同は、医学部との連携のもと、心身ともにヘルシーなキャンパスライフの支援にあたっている。

保健管理
センター
訪問



鎌田光宏

かまたみつひろ ●保健管理センター 副所長(准教授)・精神科医
／秋田大学医学部医学科卒業。
秋田大学医学部附属病院等を経て2007年より同センター勤務。
専門は臨床精神医学一般、臨床精神薬理学。

うシステムがあった世代が中心となっているため、相談することへの抵抗は少なく、大学全体での相談者数は年間延べ4,000～5,000人にも上る。その相談内容も学年が進むにつれて変化する傾向にあるようだ。入学から間もない1年次には、初めてのひとり暮らしや始めたばかりのサークルやバイトの悩み、2年次以降の専門課程のこと。それが、学年が進むにつれて研究室での仲間とのやりとりや教員との卒論に関するやりとりなどが増えてくる。さらに、最近では厳しい就職事情もあってか学習に関する不安や将来の進路問題などでの相談が増えてきている。中には、恋愛相談に訪れる学生も。それが学業の妨げになることもしばしばであり学生自ら相談に来ることも多いため、恋愛

問題、友情問題にも丁寧に対応している。

また、教職員が単独で学生のことを相談に来ることもあり、時には教職員と学生と一緒に相談に訪れるケースもあるという。万が一、うつ病などの問題が顕著な場合には学校医とも相談したり、医学部附属病院や地域の医療機関と連携したりする体制も整っているためより心強い。

専門分野の研究を通して 学生たちのこころと体の健康を支援

富樫先生も鎌田先生も保健管理センターの業務だけでも多忙な日々を送っているが、さらに医師として専門分野の研究にも熱心に取り組んでいる。特に、富樫先生は、肥満と判断される若者の比率が年々上昇していることに着目し、河田純男理事や地域教育文化学部の先生方と研究プロジェクトを立ち上げ、学生のメタボリック症候群対策に力を入れている。体格指数BMIが基準値以上の学生の協力を得て各種検査や食事と生活についてのアンケートなどを実施。「そ

れらのデータを踏まえて、若いうちから正しい生活習慣を身につけるように指導しています」と富樫先生。

本学には県外からの入学者も多く、初めて親元を離れて暮らす不安を抱えた学生、それを心配する親御さんも少なくない。「保健管理センター」では、そんな新入生をはじめ学生のみなさんのこころと体の健康管理を全面的にサポート。まず、だれかと話すことで不安や心配を和らげて一日も早く充実した大学生活を謳歌してほしいと、いつでも学生の利用を待っている。



「保健管理センター」に勤務するカウンセラーや看護師の皆さん。学生たちも気軽に診察や相談に訪れることができるとても和やかな雰囲気をつくりあげている。

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1

1 集中治療科のデスクでコンピュータ管理されたカルテや検査結果をチェックする羽田医師。デスクの向こう側が病床で、患者さんの様子が把握しやすくなっている。



2

2 集中治療室だけにベッドサイドにはたくさんの医療機器が並ぶ。必要に応じて数値をチェックし、患者さんの治療方針に反映させ、看護師に指示を出す。



3

3 看護師さんをはじめとするスタッフとは常に患者さんに関する情報を共有しておかなければならないため、全体でのミーティングや個別の打ち合わせも多い。

中学時代に決意した医者という目標を実現。 臨床で生命の尊さを胸に刻み、いずれは法医学の道へ。

信念の成果

羽田俊裕 医師

中学時代に法医学の先生の本を読み、将来は法医学の道に進もうと決意した羽田さん。その後も決意は少しもブレることなく、法医学に携わるためには医者になるしかないとい医学部を目指して懸命に勉強に励んだ。地元福島県をはじめ全国に数ある医学部の中からどの大学にしようかと考えた時、高校時代に部活動で訪れた山形の雰囲気がとてもよかったことを思い出し、一度住んでみたいと山形大学に決めたのだという。大学時代のいちばんの思い出は、障害児教育サークルでの活動。2年次以降も小白川キャンパスを拠点として障害をもった子どもたちとふれあい、子どもたちの社会性を育むお手伝いにあたった。その時の経験が医者となった今、さまざまなカタチでプラスになっていると感じている。サークルには

学内のあらゆる学部の学生が所属しており、学部の垣根を越えた仲間との交流も総合大学ならではの経験でとても楽しかったと当時を振り返る。

医学部卒業後、すぐにでも法医学の道に進みたかった羽田さんだが、尊敬する法医学の先生からは、「臨床も経験しておいた方がいい。しかも救急がいい。」とのアドバイスを受けていた。そこで、現在の職場でもある米沢市立病院で過ごした研修医時代からその言葉を意識して、研修期間の最後の半年間はずっと集中治療科(ICU)に配属してもらい、正式に勤務医となるときも同科を希望した。「今後、法医学をやっていくためには、生きるか死ぬかの究極の現場を見ておいた方がいいということだったので。治療を通してさまざまな症例を

見ておくことで、生前の姿を想像できる力が培われているような気がします。」とアドバイスの真意を理解し、法医学分野に進む際の糧にしようとしかり今の仕事と向き合っている。もちろん、救急の患者さんの診察や治療にあたることで元気になったと喜んでもらえる現在の仕事にも十分にやりがいを感じてはいるのだが、やはり“初志貫徹”の意志は硬いようだ。

「高校生の頃は泣きながら勉強していたな。」と辛かった思い出を懐かしみながら話す羽田さん。淡々とした語り口ながら強い意志を持つことの大切さ、目標があればがんばれる、後輩のみなさんにそんなメッセージを送ってくれているようだった。

今回のランナー:



羽田 俊裕

はねだ としひろ ●福島県出身、平成18年医学部卒業。2年間米沢市立病院にて臨床研修医を務めた後にそのまま勤務。集中治療科(ICU)の医師として、緊張感あふれる医療現場で診察、処置、手術等を担当している。



チームこもれび

農学部生物環境学科3年の大浦望さんが代表を務める「ツリーハウスプロジェクト」の実行部隊。メンバーは、森で遊ぶことが大好きな男女22名。演習林を一般開放し、地域の人々との交流を深めている。



ふるさと壁画プロジェクトチーム

地域教育文化学部文化創造学科院生・学生有志8名が参加。金山町に滞在し、地域の人々と交流しながら地域の魅力を描いた大作を完成させた。

演習林に“ツリーハウス”を建設し、一般にも開放。 自ら森を楽しみ、人々に森の魅力を伝えたい。

森の民実行部隊チームこもれび 農学部2・3年

森を愛する農学部有志22人が集まって「森の民実行部隊チームこもれび」を結成し、鶴岡市にある大学の附属演習林を舞台にさまざまな活動を繰り広げている。演習林を学生と地域の人々の交流の場にしたいと今年6月にはツリーハウスプロジェクトを立ち上げ、幹の太さが約4mの樹を使って、約3.6mの高さの丸太を支柱とし、高さ約3.6mの場所に4畳ほどのツリーハウスを建設することになった。ツリーハウスにはメンバーみんなが憧れや関心を持っており、地域の人々に対するアピール力も高いと考えたのだ。このプロジェクトは、学生の力で山形を元気にしようという山形大学・元氣プロジェクトの22年度事業にも採択され、材料の調達から実際の建設作業、完成後の広報活動にいたるまですべて学生たちの手

で進められた。もちろん、先生方や森林組合の方々、地元の大工さん等の指導と協力を仰ぎながらではあるが。

本格的な作業がスタートしたのは8月に入ってからで、それから10月9日の完成披露会に向けてツリーハウスの建築とハンモックやブランコの設置、焚き火広場の囲炉裏作りなどが急ピッチで進められた。披露会当日には、ターザンロープも設置され、学生たちのイメージ通りの癒しの森が完成した。演習林には夢中になって遊ぶ子どもたちの歓声がこだまし、童心に返って遊んだり、和んだりしている大人たちの笑顔にあふれていた。ツリーハウスを堪能した人々からは「最初は高さに驚いたけど、10人くらいで歩き回ってもビクともしないほど頑丈で、ぜんぜん怖くなかった。」「ターザン

ロープやハンモックもあって楽しい。」「羨ましい。自分もメンバーに入りたかった。」など、予想以上の反応があり、メンバー全員が手応えを感じていた。ツリーハウスは高さがあるだけに人命にも関わりかねないと、建設段階からメンバーや利用者の安全面に大きな責任を感じていたメンバーたちも、強度面でのお墨付きを得てホッと胸をなでおろした。そして、学生のうちから「仕事」「命」というものに真剣に向き合うことで自らの成長を実感できたという。

今後もツリーハウスはよりパワーアップし、さらに後輩たちへと受け継がれ、森の素晴らしさを体感できるフィールドとして活用されることだろう。ひっそりとしていた演習林が、春にはまた人々の歓声に包まれることになる。

好きの成果



1 ひっそりとしていた演習林がたくさん笑顔と歓声に包まれた。地元の人々や子どもたちとツリーハウスの完成を喜び合う「チームこもれび」のメンバーたち。



2 材料となる丸太や角材を温海森林組合で調達。廃材の釘を抜いたり、丸太に切り込みを入れたり、慣れない手付きながら黙々と大工仕事に精を出すメンバーたち。



3 焚き火広場にレンガを使った囲炉裏(いろり)を製作。砂利を敷いて踏み固め、レンガを積んでモルタルで接着していく工程は、まるで幼い頃の粘土遊び気分。



1

1 完成した壁画の前で「ふるさと壁画プロジェクト」メンバーと地元の子どもたちで記念撮影。メンバーはほとんどが女性ながら力強く根気強く巨大な壁面に挑んだ。



2

2 10月20日の完成除幕式で、制作の経過報告や感想を語るプロジェクトチーム代表の千葉はるかさん。チームをまとめてプロジェクトを成功に導いた大学院生。



3

3 中田小学校の児童18名と一っしょに絵を描いた日。児童にマンツーマンで絵画指導ができ、学生たちには良い経験となり、子どもたちも楽しんでくれた。

縦1.8m、横21.6mの巨大なふるさと壁画を制作。地域に魅せられ、町のリピーターになると誓う。

ふるさと壁画プロジェクトチーム 地域教育文化学部院生・学生

今年10月20日、金山町中田地区で「ふるさと壁画プロジェクト」の完成、除幕式が執り行われた。このプロジェクトには、ふるさとの風景や思い出、四季折々の伝統行事を後世に伝え、地域の方々の心の拠り所となり、さらには子どもたちが将来まで地元を愛するようとの思いが込められている。壁画の制作を担当したのは、地域教育文化学部造形芸術コースの学生有志によるプロジェクトチームで、八木准教授の指導のもと5月から活動をスタートさせた。

まず、院生の千葉はるかさんを代表とするメンバーたちは金山町中田地区を訪れ、自然を肌で感じ、地域の人々との交流に努めた。今回の壁画プロジェクトは地元小学生参加型。中田小学校の児童にふるさとの春夏秋冬の思い出を絵にしてもらい、それ

らを元に原画を制作した。原画を担当した我妻愛美さんは、祭り、フリスビー、餅つき、スキーなどの子どもたちのモチーフに、自らが現地を訪れて受けた印象なども織り交ぜて、水彩画風のとても優しい絵を完成させた。タイトルは『優しい時間と思い出の中田(まち)』。現地ですべての壁画制作が始まったのは9月。メンバー全員、3泊4日の泊まり込みで集中的に取り組み、一気に完成させる計画で進行。滞在中は、金山町の伝統的な白壁造りの体験住宅に住まわせてもらい、合宿気分楽しく快適な日々を過ごすことができた。

地元の人々の歓迎ムードとは裏腹に、実作業面では初日からアクシデントに見舞われた。壁画の制作場所であるトンネル(国道13号線ボックスカルバート)内に湿気によ

る結露が発生し、ペンキが流れ落ちてしまったのだ。それでも、地元の人々の協力や専門家のアドバイスもあって再開。3日目から小学校の児童たちと、一っしょに絵を描くことで、すっかり馴染むことができた。若干の作業の遅れはあったものの、無事完成。10月20日に除幕式を迎え、地域の人々に喜んでもらってホッと胸を撫で下ろした。地域の人々の拠り所となり、将来、ふるさとを離れた子どもたちが帰ってくるきっかけになるようにと制作されたこの壁画。だが、今までこの地域とは何の縁もなかったはずの学生たちが、「私たちがまたこの壁画のもとに帰ってきます。」と中田地区への愛着を口にする。「ふるさと壁画プロジェクト」は、着実に地域と学生を近づけ、結びつけていくようだ。

交流の成果

地域教育文化学部 公演のお知らせ

問い合わせ
地域教育文化学部
文化創造学科 藤野研究室
TEL 023-628-4330

第15回オペラ研究会 YCM本公演「ヘンゼルとグレーテル」

日時／3月5日(土)
場所／山形中央公民館(アズ七日町6F)
対象／一般の方 入場料／500円
YCMオペラは「山形の音楽仲間」という意味で、設立21年を越えています。1997年からは年1回の外部公演(本公演)を行っています。今回の最大のポイントは、初めて小学生の皆さんと共演することです。山形四小さんのご協力の下、児童の皆さんが天使役や子ども役として約30名オペラに出演します。大学生のキャストや合唱、スタッフたちと共にすてきなメルヘンの舞台を作りあげてくれるでしょう。

第39回 室内楽のタベ

日時／3月13日(日) 14:30～
場所／山形中央公民館(アズ七日町6F)
対象／一般の方 入場料／300円
「室内楽のタベ」は、ピアノや管弦打楽器、あるいは声楽からなる様々な演奏形態のアンサンブル作品を取り上げ、学外で公演している演奏会です。音楽芸術コースでは伝統的にアンサンブルと個人レッスンの2本柱を教育方針に掲げています。

モンゴル初の日本式高校

人文学部 法経政策学科
2年 オノンバヤル・ボロルドイ

Shine Mongol high school (「新モンゴル」高校)は、日本の教育スタイルや制服、給食、部活などを取り入れたモンゴル初の日本式の高校です。

2000年にモンゴルの首都ウランバートル市に設立され、今年の7月には開校10周年を迎え、モンゴルに日本の教育スタイルが普及しつつあります。

「新モンゴル」高校校長のジャンチブ・ガルバドラッハ氏が、山形大学教育学部(現在、地域教育文化学部)出身の方であり、また学生時代に知り合った山形県民の支援を受け、「新モンゴル」高校の創立に至ったことから、「新モンゴル」高校は、山形県民、そして山形大学と昔から交流があります。私は同校を卒業し、現在山形大学人文学部に在籍しています。

留学期間中に、山形の方々と交流を深めようと、様々な交流活動を行っています。その中の1つが、山形県立東根工業高等学校(東根工業高校)の生徒会と行って

いる「光プロジェクト」です。このプロジェクトは、東根工業高校の生徒たちが作った手作りの太陽電池パネルを「新モンゴル」高校に設置する国際貢献事業です。

平成21年度から3年計画で進められ、毎年夏には、東根工業高校の生徒たちがモンゴルに訪問し、「太陽光発電電化システム」の設置、現地高校生に技術指導を行っています。訪問中はホームステイをするなど、山形とモンゴルそれぞれの文化に触れ、両校の交流を深めています。

また、この他の交流活動として、10月には村山国際クラブの方々と村山市の甌

葉(しょうよう)プラザで「モンゴルの秋祭り2010」を開催しました。祭りでは、モンゴルの伝統的な住居であるゲル(テント)を立て、馬頭琴の生演奏やモンゴル相撲などが行われました。

山形の方々にモンゴルの文化に触れていただき、モンゴルを知っていただくよい機会となりました。イベントは大盛況となり、来年も開催することとなっています。

今後も、モンゴルと山形の架け橋となるような交流を進め、日本に、また山形大学に大勢のモンゴルの留学生が入ることを願っています。



馬頭琴の生演奏中



東根工業高校の生徒会のみなさんモンゴル着

上海で「花笠踊り」を披露しました

地域教育文化学部 文化創造学科 異文化交流コース
2年 鈴木愛里奈

私たち15人は、10月27日(水)～30日(土)まで上海万博訪問団の一員として訪中をしてきました。メディアでも多く取り上げられたこの話題ですが、私たちはこの体験を通し、中国について深く考えさせられるきっかけとなりました。

このメンバーは、IF～International Friendship～という留学生支援のサークルのメンバーを中心として集められています。今回は東北地方の中でも1校だけということもあり、東北の代表として、そして山形の代表として花笠踊りを

披露して来ました。

本来は10人のメンバー構成で踊る予定でしたが、今回の日中間での政治的な衝突による延期により当初よりメンバーが減って、6人での花笠踊りの発表でした。時間もない中での練習と半分が初心者という状態でのスタートでしたが、一人一人が昼休みなど短い時間で練習を重ねて来ました。

本番では、1000人弱の前という大舞台での発表はとても緊張しましたが、やり終えた後の達成感は素晴らしいもので

した。また踊り終えた後に、中国の方から「wonderful!」と強く手を握りながら笑顔でいっていただけたことは忘れられません。山形の「花笠踊り」を通して会場が同じ感動を感じることができたのです。

また花笠踊りだけではなく、現地の学生ボランティアの人達との交流は私たちに深い友情を与えてくれ、その友情こそが将来の日中関係をよりよくしていく第一歩になったのではないとも感じました。

今回の訪中で、私たちは中国側の配慮のもと、実り多き体験ができたと感じています。この貴重な体験をもとに、私たち一人一人が中国という隣国についてもっと学び、知識を深めて行くことが大切であると実感させられました。

このような機会を与えて下さった中国や日中友好会館の皆さま、そしてなによりサポートして下さいました山形大学の方々には本当に感謝しております。ありがとうございました。



イギリス館前にて



花笠踊り披露の様子

入学試験

※受験に関しては、必ず各募集要項でご確認ください。

大学入試センター試験

試験期日／1月15日(土)・16日(日)
試験会場／山形大学小白川地区試験場(山形市)
山形大学工学部試験場(米沢市)
鶴岡中央高等学校試験場(鶴岡市)
新庄神室産業高等学校(新庄市)

学部

人文学部

- 一般入試(個別学力検査)
出願期間／1月24日(月)～2月2日(水)
前期日程／2月25日(金)
後期日程／3月12日(土)
試験会場／小白川キャンパス(山形市)
- 私費外国人留学生
出願期間／1月17日(月)～20日(木)
試験期日／2月9日(水)
問い合わせ／人文学部学務チーム
TEL 023-628-4207

地域教育文化学部

- 一般入試(個別学力検査)
出願期間／1月24日(月)～2月2日(水)
前期日程／2月25日(金)・26日(土)
後期日程／3月12日(土)
試験会場／小白川キャンパス(山形市)
- 私費外国人留学生
出願期間／1月17日(月)～20日(木)
試験期日／2月25日(金)・26日(土)
問い合わせ／地域教育文化学部学務チーム
TEL 023-628-4310

理学部

- 一般入試(個別学力検査)
出願期間／1月24日(月)～2月2日(水)
前期日程／2月25日(金)
後期日程／3月12日(土)
試験会場／小白川キャンパス(山形市)
- 推薦入試Ⅱ(物理学科除く)
出願期間／1月17日(月)～20日(木)
試験期日／1月29日(土)
- 私費外国人留学生
出願期間／1月17日(月)～20日(木)
個別学力検査は課しません
問い合わせ／理学部学務チーム
TEL 023-628-4710

医学部

- 一般入試(個別学力検査)
出願期間／1月24日(月)～2月2日(水)
前期日程／2月25日(金)・26日(土)
後期日程／3月12日(土)
試験会場／飯田キャンパス(山形市)

- 私費外国人留学生
出願期間／1月17日(月)～20日(木)
試験期日／2月25日(金)・26日(土)
問い合わせ／医学部入試担当
TEL 023-628-5049

工学部 昼間コース

- 一般入試(個別学力検査)
出願期間／1月24日(月)～2月2日(水)
前期日程／2月25日(金)
後期日程／個別学力検査は課しません
試験会場／米沢キャンパス(米沢市)
札幌試験場(札幌市)
名古屋試験場(名古屋市)
- 推薦入試Ⅱ(情報科学科、電気電子工学科)
出願期間／1月17日(月)～20日(木)
試験期日／1月29日(土)
- 私費外国人留学生
出願期間／1月17日(月)～20日(木)
試験期日／2月26日(土)
問い合わせ／工学部入試担当
TEL 0238-26-3013

工学部 フレックスコース

- 一般入試(個別学力検査)
出願期間／1月24日(月)～2月2日(水)
前期日程／2月25日(金)
試験会場／米沢キャンパス(米沢市)
札幌試験場(札幌市)
名古屋試験場(名古屋市)
- 問い合わせ／工学部入試担当
TEL 0238-26-3013

農学部

- 一般入試(個別学力検査)
出願期間／1月24日(月)～2月2日(水)
前期日程／2月25日(金)
後期日程／個別学力検査は課しません
試験会場／小白川キャンパス(山形市)
鶴岡キャンパス(鶴岡市)
- 私費外国人留学生
出願期間／1月17日(月)～20日(木)
個別学力検査は課しません
問い合わせ／農学部学務担当
TEL 0235-28-2808

大学院

社会文化システム研究科

- 修士課程
第2回選抜試験
出願期間／1月4日(火)～6日(木)
試験期日／2月10日(木)
問い合わせ／人文学部学務チーム
TEL 023-628-4207

医学系研究科

- 博士前期課程
看護学専攻(第2次募集)
出願期間／12月3日(金)～9日(木)
試験期日／1月5日(水)
- 生命環境医科学専攻(第2次募集)
出願期間／12月10日(金)～15日(水)
試験期日／1月7日(金)
- 博士後期課程
生命環境医科学専攻(第2次募集)
出願期間／12月10日(金)～15日(水)
試験期日／1月7日(金)
- 博士課程
医学専攻(第2次募集)
出願期間／12月10日(金)～15日(水)
試験期日／1月7日(金)
問い合わせ／医学部入試担当
TEL 023-628-5049

理工学研究科(理学系)

- 博士前期課程
第2回選抜試験
外国人留学生入試(平成23年10月入学)
学部第3年次学生を対象とする特別入試
出願期間／1月4日(火)～14日(金)
試験期日／2月21日(月)・22日(火)
- 博士後期課程
第2回選抜試験
外国人留学生特別入試(平成23年10月入学)
外国人留学生推薦入試(平成23年10月入学)
出願期間／1月17日(月)～21日(金)
試験期日／2月18日(金)
問い合わせ／理学部学務チーム
TEL 023-628-4710

理工学研究科(工学系)

- 博士前期課程
第3回選抜試験
出願期間／3月2日(水)～4日(金)
試験期日／3月11日(金)
- 博士後期課程
第2回選抜試験
出願期間／1月17日(月)～21日(金)
試験期日／2月26日(土)
問い合わせ／工学部入試担当
TEL 0238-26-3013

農学研究科

- 修士課程(第2次募集)
出願期間／1月4日(火)～6日(木)
試験期日／1月19日(水)
問い合わせ／農学部学務担当
TEL 0235-28-2808

式典行事

平成22年度 学位記・修了証書授与式

- 農学部
日時／3月17日(木) 11:00～

場所／東京第一ホテル鶴岡(鶴岡市)

- 工学部
日時／3月21日(月・祝) 10:00～
場所／米沢市営体育館(米沢市)
- 人文学部、地域教育文化学部、理学部、医学部
日時／3月25日(金) 10:00～
場所／山形県体育館(山形市)

卒業研究発表会

地域教育文化学部

学科・コースで行われている研究や活動を知る好機ですので、ぜひおいでください。
入場料／無料

山形大学の行事・催事のご案内です。
地域に根ざした大学としてみなさんのご参加をお待ちしています。

●地域教育学科

日時/2月11日(金) 9:30~16:00(予定)
場所/地域教育文化学部1号館
問い合わせ/地域教育学科 皆川研究室
TEL 023-628-4411

備考/多様な専門分野を持つ教員の指導のもとで、学生が2年間続けてきた卒業研究の結果を発表します

●文化創造学科 音楽芸術コース

日時/2月7日(月)・8日(火) 17:00~
場所/山形テルサ テルサホール(山形市)
問い合わせ/音楽芸術コース 藤野研究室
TEL 023-628-4330

●文化創造学科 造形芸術コース

日時/2月2日(水)~6日(日)
5日(土) 卒論修論発表会
6日(日) ギャラリートーク
場所/山形美術館(山形市)
問い合わせ/造形芸術コース 降旗研究室
TEL 023-628-4347

●文化創造学科 スポーツ文化コース

日時/2月16日(水) 10:00~14:30(予定)
場所/地域教育文化学部3号館B31教室
問い合わせ/スポーツ文化コース 大貫研究室
TEL 023-628-4434

●文化創造学科 異文化交流コース

日時/2月22日(火) 9:00~17:00
場所/基盤教育2号館 221番教室
問い合わせ/異文化交流コース 小関研究室
TEL 023-628-4827

備考/聴講はお問い合わせください。当コースでは2月に3年生構想発表会、9月に4年生中間発表会を実施します。

●生活総合学科 生活環境科学コース

日時/2月9日(水) 9:30~17:00(予定)
場所/地域教育文化学部1号館会議室
問い合わせ/生活環境科学コース
佐藤研究室
TEL 023-628-4377

農学部

毎年3つの学科が公開卒論発表会を行っています。受験を考えている高校生、アイデアの種を探している企業の方々、農学に関心をもつ地域の方々など、実際に行われている研究を見聞きできる好機ですので、ぜひおいでください。

入場料/無料(予約不要)

※プログラムなどの詳細が確定次第農学部HPで紹介いたします。

●生物生産学科

日時/2月下旬 13:00~17:00(予定)
場所/学外(鶴岡市内)
発表形式/ポスター発表
問い合わせ/教育研究支援室
(生物生産学科担当)
TEL 0235-28-2901

●生物資源学科

日時/2月18日(金) 9:00~16:00
場所/3号館1階(101、102、103講義室)
発表形式/ポスター発表
問い合わせ/教育研究支援室
(生物資源学科担当)
TEL 0235-28-2819

●生物環境学科

日時/2月16日(水)森林環境資源学講座
18日(金)地域環境科学講座
両日とも8:50~17:00
場所/3号館301教室
発表形式/口頭発表
問い合わせ/教育研究支援室
(生物環境学科担当)
TEL 0235-28-2843

公開講座等

理学部

小さな科学者 体験学習会 マイナス200度の世界

日時/3月12日(土) 13:30~15:30
場所/SCITAセンター(理学部1号館1階)
対象・募集人数/小学4年生~中学生(定員20名)、およびその保護者の方
参加料/無料
申込期間/2月7日(月)~3月2日(水)必着
問い合わせ/理学部事務ユニット
TEL 023-628-4505

農学部

第3回(冬) 森の学校

知雪・親雪体験(積雪観察、カンジキ歩行、かまくら設営、そり滑り、スノーモビル乗車)、また、林内は雪上車に乗車して移動します!
日時/1月29日(土)
場所/農学部附属やまがたフィールド
科学センター上名川演習林(鶴岡市)
対象・募集人員/小学校3~6年生若干名
参加費/500円(保険料、教材等)
問い合わせ/農学部附属施設チーム
TEL 0235-24-2278

附属学校

山形大学附属特別支援学校 冬季学習会

日時/2月2日(水) 14:15~16:30
場所/附属特別支援学校
内容/「山形大学教員との共同研究」報告並びに研究協議
参加費/無料

問い合わせ/附属特別支援学校
TEL 023-631-0918

ハートバザー

日時/2月22日(火) 10:00~14:30
場所/イオン山形南ショッピングセンター
(山形市若宮3-7-8)
内容/高等部 作業学習製品の販売
木製マルチラック、ウッドスタンド、
手漉きハガキ、ビーズプレスレット
なべしき、ふきん等
問い合わせ/附属特別支援学校
TEL 023-631-0918

キャンパス・イルミネーション

小白川キャンパス イルミネーション

今年で5年目となる小白川キャンパス・イルミネーションは、約1万個の電飾で、正面ロータリー中央の松の木を彩ります。
期間/12月1日(水)~2月28日(月)
点灯時間/16:30~21:00



工学部キャンパス内の イルミネーション

今年で7年目となる工学部(米沢キャンパス)・イルミネーションは、約5万1千個のLED(発光ダイオード)の電飾で、正門から工学部図書館までの並木、事務棟正面と百周年記念会館前広場を彩ります。
期間/12月1日(水)~2月28日(月)
点灯時間/16:00~24:00





山形大学 工学部 百周年記念会館竣工

山形大学工学部は、前身である旧米沢高等工業学校が1910年(明治43年)に開学して以来、今年(平成22年)で創立100周年を迎えました。これを記念して様々な事業を実施していますが、最も大きな事業が「工学部百周年記念会館」の建設です。この建設にあたっては、工学部の卒業生、産業界、米沢市民の方々に始め工学部を応援して下さっている多くの皆様から御寄附を賜りました。この紙面をお借りし、改めて厚く御礼申し上げます。

「工学部百周年記念会館」は、百周年記念プラザと共に、工学部の新たなシンボルの核となります。「工学部百周年記念会館」は、「平成」の建築として〈プラザ〉を挟んで「明治」の旧米沢高等工業学校本館と対峙する構成となっています。

100年の輝かしい歴史とのふれあい・人とのふれあいを大切にした創造性豊かな活動が行える場とし、卒業生、修了生の活動組織及び在学生の保護者による工学部支援の拠点とします。さらに、企業及び市民の参加型大学を目指す工学部の社会連携の拠点とします。

セミナールームの利用希望の方
米沢工業会(山形大学工学部同窓会) TEL 0238-22-7866

● 記念会館の施設概要



セミナールーム
(小ホール機能を兼ねる)
(収容人数:80名程度)
学生・教員のセミナー、企業研究者とのミーティング、市民との交流会等に利用



喫茶室(cafe 吾妻)
カフェテリアとして
外部委託業者が運営
営業時間/8:30~21:00
定休日/土・日・祝日



迎賓室
(収容人数:10名程度)
工学部等への来訪者との懇談等に利用



百周年記念プラザ
大学が地域と共生する
シンボリックな場所で、
各種行事に利用

編集後記 Editor's Note

ナスカ地上絵プロジェクトの記事は、歴史好きな人だけでなく一般の人にも今後を期待できる紹介内容になっている。ぜひ報告を公開講座や書籍などで知りたいとだれもが思うのではないだろうか。エジプトといえば某私立大学が有名だったが、ナスカの地上絵といえば山形大学になるのも近い気がする。山形大学が中心となって進めていくプロジェクトでその成果は世界に役に立つものになってほしいと思う。もし、可能なら現地に行ってみよう。表紙の写真で現地で履いている大きな下駄?スリッパみたいなものはなんだろうか。遺跡を保護するために履いているように思うが、聞いてみよう。現地に拠点ができたら、研究以外にも山形大学として地域に貢献できる機会も増えることを考えているのは私だけではないだろう。

(みどり樹編集委員会委員 栗山恭直)

表紙のことば

ナスカの地上絵のうち放射状直線とその中心点(ラインセンター)が今回のメインテーマ。地上絵を傷つけないように、大きなサンダルを履いて台地に入る。

●この「みどり樹」は山形大学ホームページでもご覧いただけます。

●「みどり樹」に対するご意見・ご質問等をお気軽に御寄せください。

E-mail: sombun@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

●「みどり樹」は、3月、6月、9月、12月に発行する予定です。

— 地域に根ざし、世界を目指す —



山形大学ホームページ <http://www.yamagata-u.ac.jp/index-j.html>